
何時でも何処でも衝動人と幻想人

蒼惟 宙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何時でも何処でも衝動人と幻想人

【Nコード】

N5131D

【作者名】

蒼惟 宙

【あらすじ】

仙路香美はワケあつて若い叔母と2人暮らし。そんな香美の元に、ある日同級生の橘虹音^{たちばなにしと}がやって来て居候することになった。しかし虹音は実は幽霊で・・・

第一章　これが最初

日が短くなって、六時頃にはもう辺りは暗い。俺は家から三十分程離れたコンビニからの帰り。買ったパンやジュースが入ったビニール袋を手下げ、電灯の無い真つ暗な道を、ぽてぽて歩いていた。高校生くらいの女子二人組みと十分ほど前にすれ違ってから、全く人は通らない。

「こんなところ、一人じゃ歩けないよね。」

ミニスカートの女子高生が言った。

「うん。でも、あの娘一人で歩いてるよ。」

長いポニーテールの子が答えた。ミニスカートの子は少し黙っていたが、

「君イェ！気をつけてね！」

急に俺の方を振り返って手を振りながら微笑んだ。俺は驚いたが、彼女達の方を振り返り、「ありがと。」と微笑み返した。

思った通り、彼女たちは何かひそひそ言いながら行ってしまった。

彼女たちが何を話していたのか分かってる。良くある事だ。

でも、さっきだけは…間違えられても不快感は無かった。むしろ、十分前の子達を思い出して、俺は少し嬉しくなった。まあ、誘拐されないように一応気をつけておこう。そう思った。

あと何mかで家に着く。帰っても誰もいない冷たい俺の住処に。

と、玄関のところで突然何か黒い塊が動いた。

…驚いた。泥棒？まさか。こんな所に入っても何も無いですよ。ましてや幽霊等の存在は信じていないので気にせずに足を進めた。すぐ近くまで行くと、その黒い塊は、今度は大きくゴソつと音をたてて動いた。俺は立ち止まった。不審人物かどうか確かめたかったが、何しろどこにも電灯が無い所だから顔も何も見えない。

「…仙路^{せんじ}さん？」

突然黒い塊の方から、聞いたことのあるような、男か女か判別のつかない澄んだ声が聞こえてきた。

俺は返事をせずに、その人を大きく避けながら玄関のドアノブを手探りし、鍵を挿してドアを開けた。入ったすぐの所にあるスイッチを押すと、玄関のオレンジ色の照明が周りに広がっていった。

「…お前か。」

俺から少し離れて立っていたのは、同じクラスの橘^{たちはな}だった。荷物らしき物は何も持っていない様子で、灰色のロングコートに淡い抹茶色のマフラーを巻いている。しかし、あまり寒がっている様には見えなかった。不思議な奴だ。橘はいつもの様に口の両端をキュツと少し上げて俺に視線を向けている。

俺はどうして良いのか分からなくなつて、頭の中で交通渋滞が…簡単に言えばパニックになった。

とりあえず「上がれよ。」と言ってみた。

すると、橘は嬉しそうに眼を輝かせて、俺の後についてきた。

俺は二階の自分の部屋で橘を待たせて台所に行った。そこでコーヒーを入れて、階段を慎重に上った。

部屋に入ると、橘はたんだコートとマフラーを自分の横に置き、部屋の中央に置かれた黄色の小さい丸テーブルの前に姿勢良く座っていた。俺はテーブルにコーヒーを置くと、橘の向かいに座った。すると何故か橘は眼を見開いて、まるで奇怪な物を見ている様な顔をして、俺を見た。俺は頭が？で一杯になった。

「…コーヒーだよ。ちゃんと砂糖は入れたんだ。苦くないと思うよ。」

橘は音が聞こえてきそうな瞬きをしてから、ゆっくりと、何も絵柄の無いマグカップを見下ろした。そして手にとって飲み始めた。

半分ほどを一気に飲み、フー…と息をついた。

「ありがとう」

そう言つて橘は眼を細めて微笑んだ。横から光りが射し込んできそうな笑みだ。まるで絵に描いたような子だ…と、俺は橘が視界に入

つてくる度に思う。睫毛が長くて、輪郭はスツと細くて整っている。背はそんなに高くないが、モデルみたいだと言ってもお世辞にならないすらりとした体型だ。

「おいしいね、コーヒー。」

橘の言葉で、俺は一瞬の心の旅から現実呼び戻された。

「そお…。」

それだけ言ってから俺は自分の分のコーヒーを飲んだ。

「ごめんね、家に上げてくれたのにお礼も言わなくて。仙路さんが部屋に上げてくれて嬉しかった。ありがとう」

橘はまた一口コーヒーを飲んだ。俺はその言葉が素直に嬉しかった。なんて言えば言いのか分からないけど…。俺は、橘全部を見た。

俺がお前を上げたのは

「…いから…」

「え？」

橘がマグカップから顔を上げた。

「外寒いから…あ」

俺は暖房がついていない事に気づき、横に転がっているリモコンのボタンを押した。と、その時、突然橘がくすくすと笑いだしたので、俺は心臓が止まりそうになるほど驚いた。

「なっ、なに？」

自分が変な事でもしたのかと、今の行動を思い返してみた。

「いや、なんか不思議な気持ちになっちゃって。そしたら急に可笑しくなったんだ。ごめん…クククッ」

橘はまた少し笑ってからハアゝアと、自分を落ち着かせるようにため息をついた。

「それは良いけどさア、橘、いい加減『仙路さん』って言うのやめてくれよ。」

俺は座り直しながら言った。

「え…なんで？仙路さん」

「『さん』じゃないってば…『仙路君』！ってか今のはわざとだろ。」

「俺は早口で最後まで言った。橘が楽しそうに笑い、

「まあね。でも大人になつて社会に出たら、男女関係無く『さん』
つてつけるよ?」と悪びれ無く言った。

「はあ?とにかく俺は『君』が良いの!」

「ふーん。わがままなんだな。せ・ん・じ・さんつ。」

橘は俺の目の中を覗きこむようにジーツと見ていた。

「お前なアゝっ…。ったく、何しに来たんだよ?」

俺はこれ以上この話をするのが馬鹿らしくなったので、強制的に終わらせた。すると何故か橘がきちんと座り直した。俺は思わず身構えてしまった。今の質問はまずかったか?それとも言い方が…

「家で父さんと母さんが喧嘩した。それで家にいるのが嫌になつて家出した。」

橘は棒読みでスラスラと言った。聞きながら俺はコーヒーを飲み干し、頬杖をした。

「ふーん…」

俺は思ったままを言った。橘は、口の両端を少し上げた表情のまま何も言わない。

家を飛び出して、行く宛てが無いからクラスメートの家に来た…ただそれだけの事。別に驚く事でも何でもない。俺は言葉を続けた。

「他の子のところは?」

言ってから、しまったと思った。こいつはあまり他の奴と話をしない。べつに苛められているとかそんなのじゃなくて、なんとなくそうになっている、というような感じだ。しかし、橘はウーンと背伸びをしてから、全然気にしていない様子で改めて俺の顔を見た。

「仙路さ…仙路君じゃないと駄目な気がしたから。」

橘は言い終わつたと同時に、拝むように俺の前で手を合わせた。

「という訳で仙路君!しばらく君の家に居候させてくれない?お願いっ。」

別に手を合わせてお願いされなくても良いんだけど…

「良いよ。これから冬休みだし。好きなだけ泊まってきなよ…俺の

部屋で良ければ。」

僕はそう言ってから立ち上がった。橘は満面の笑みを浮かべて、「
ありがう」と言った。

橘が風呂を使い終わって、部屋に上がってきた。少し青みがかつた
黒いウルフカットの髪が、蛍光灯の光で光っていて奇麗だと思った。
俺が貸したトレーナーは、少し橘には大きかったようだ。

「この家のシャンプー、すごく良い匂いだね！」

橘は人の家に泊まった事が無いのか、さっきからずっとはしゃいで
いる。丁度橘の分の布団を自分のベッドの横に敷き終わった俺は、
そんな橘を見ていてなんだか楽しい気持ちになった。こんな気持ち、
なんか懐かしいな……

「あのなあ……人の家のシャンプーなんてどーでもいいだろ？次俺
入るから、勝手に周りのモン触んなよ。いいな？」

橘は「あゝい」と返事をしながら、水色のカバーがかかった敷布団
の上で胡座をかいて辺りをキョロキョロ見回していた。

……ホントに大丈夫なのか？

「おい、入るぞ？」

俺は風呂から上がって部屋に入る前に一応確認を取ってみた……が、
返事はない。もう寝たのか？まだ十時くらいだけど。

構わず入ると、橘は……立っていた。

ただそれだけなら別に何とも無い。が、微動だにせず、ただ静かに
立っているだけ。

……なんなんだ？

「おい……はしゃぎ過ぎてバッテリー切れか？それともメデューサが
来たのか？……おいつ！」

ゆつくりと、橘の顔が俺の顔に向いた。光の射さない虚ろな目が、
俺を不安にさせた。

俺は橘の真正面に行き、目のすぐ前で手をブンブン振った。すると、

ピクつと瞼が上がり、まるで真つ暗な穴でも空いたような闇色の瞳に、電気の光りが映った。

橘は初め、ここにどうして俺がいるのか理解できていない顔をしたが、すぐに納得のいった様な笑みを浮かべた。

「ああごめんごめん。なんかボーツとしてた。」

橘はハハハと呑気に笑った。

「それなら…良いんだけど。」

俺はホツと息をついて言った。

「ごめんね。ありがとう。」

橘はへへツと照れくさそうに笑った。俺は頭の中にまた？を浮かべたまま電気を消して自分のベッドに潜り込んだ。橘も、何も言わずに布団に入った。音はしなかったが、なんとなく感じて分かる。俺は闇が広がった天井を見つめた。

「ねえ、そういえば仙路君、香美^{かみ}って名前だよ。どんな字？」

突然橘が喋ったので、俺はまたもや心臓が止まりそうになった。

…聞いてどーすんだよ。

「香るに美しいだよ。」

俺はひとつ欠伸をしてから言った。

「へえー…」

橘が感心したような声で言った。

「じゃあ仙路君のこと、香美って呼ぶね。僕のこともしジトで良いから。おやすみ。」

そう言つと橘は何も言わなくなった。

…はい？

俺に拒否権は無いのか？

でも…橘の名前、虹音って書いてにじとつて読むのか。珍しい名前だな。そんな事を考えながら眠りについた。

第二章 俺の叔母さん

俺たちの長期休暇一日目の天気は、土砂降りとなった。今日は外に出られない。激しく地面を打つ雨音に、俺は目が覚めた。

…ちっ、まだ5時半じゃねえか。

自分の横に置いてある、四角い何の変哲も無い黒色の時計を見て、俺はなんだか損をした気分になってしまった。

もう一度寝ようと布団に潜り、まだ薄暗い部屋の方を向いた。

「…虹音」

すぐ近くに、窓枠にもたれる虹音がいた。俺の部屋は、壁一面が窓になっている。この家の二階の部屋の窓は、全てこうなっている。

虹音は開いている窓から窓枠にもたれて外を眺めている。灰色の瞳を持つが、少し翳っているように思われた。

何処を見ているんだろう…

「おはよ。雨だね。」

虹音が俺に気がつき、こっちを向いて静かに言った。

「…だな。」

俺は身体を起こして、ベッドの端に腰掛けた。虹音が横にちょこんと座った

「虹音ってよんでくれた！」

そう言いながら、嬉しそうに笑った虹音の寝癖のついた髪が、窓から入りこんだ冷たい風に、フワッと揺れた。

…触りたい。

俺は、その衝動を振り払った。

「雨の音を聴くと、弟を思い出すよ。」

虹音の翳った眼が、俺の眼をしっかりと捕らえて離さなかった。

「弟が…いるのか？」

おどろきだ。

虹音はフツツと寂しそうに微笑んで、俺から視線を外した。

「空音そらねっていうんだ。…行方不明だけど」
「？」

「僕が十二歳の時に、突然いなくなっただんだ。どうしても分からないけど…」

「…それで？」

「一日中捜したけど、見つからなかったんだ。僕は家で無事を祈るしかなかった。」

それから何日かして、雨が降ったんだ。僕は自分の部屋にいて、もう一度捜しに行こうか考えてた。でも、空音は自分から帰ってきた。僕にだけ会って、親には会いたがらなかった。「雨が降ったら帰ってくるから」って言って、また出ていった。それから、雨が降ると戻ってきた。野宿でもしてたのかな。僕らはその事を二人だけの秘密にして、いつも楽しみにしてたんだ。けど、三年ぐらい経った頃から、空音はぱったり来なくなった。今、どこにいるのか分からない…。」

ハア―とため息をつくとき、もう一度俺の方を見て微笑んだ。

「ごめんね、こんな面白くもない話。あゝっ！なんか背中痛くなっちゃったっ。」

虹音はそう言って立ち上がった。そして、布団をたたみ始めた虹音を、俺はずっとベッドの端に座って見ていた。

「ういゝ昼かゝっ。なんかダルいゝ。」

虹音は首をボキッボキッと鳴らしながら言った。

俺たちはする事も無いので、トランプをしていた。ちっとも面白くないのだけど…

「ねえゝ他に何か無いのぉ？」

「ゲームの類は持ってないんだ。家はテレビも無いしね。あしからず。」

俺は足を伸ばしてベッドにもたれ掛かった。

と、下でガタガタと、何か落ちる音がした。はじめは泥棒かと思っ

たが、すぐに違つと分かつた。あの音は…

「ね…今の音なに？」

虹音が飛び起きて、俺の耳元でコソコソと言った。

「多分、伯母さんが帰ってきたんだろ。」

「…オバサン？」

「虹音、ちよつと隠れてろ」

俺は首を傾げる虹音に囁き返すと、クローゼットを指差した。服が数枚入っているだけだから、小柄な虹音なら隠れられるだろう。虹音は更に首を傾げながらも、クローゼットに入って引き戸を閉めた。俺はランプをまとめて、黄色いミニテーブルの下に置いた。

あの人が虹音を見つけたら、少し大変な事になるだろう…。

俺は直感した。

ダンダンダンっという音が聞こえたかと思うと、潰れてしまうのではないかと思うくらいものすごい勢いでドアが開いた。

そこには、淡いピンクのワンピースに、白のカーディガンを羽織っている女性が立っていた。腰まであるキャラメルブラウンのストリートが、少し乱れている。化粧もしていない様だ。

「香美！ここにいたのね？私…私…」

オバサンと呼ぶには若すぎる僕の叔母さんの両目から、涙が零れた。叔母さん…俺は天子姉さんと呼ぶのだが、彼女は部屋に入ってきて、俺の目の前で止まった。

「香美、私また…」

天子姉さんはそう言うのと、いきなり俺に抱きついてきた。
あまね

俺はいつもの事ながら、「しょうがないなあ」と思う。彼女が男の人に捨てられるのは常なのだ。でも、天子姉さんは、正直に言ってもかなり美人だと思う。みんなも彼女の事を奇麗だと言ってる。なのに何故捨なのだろう？俺にはよく分からない。

「天子姉さん、泣かないで。」

俺はいつもの台詞を言った。天子姉さんは俺より五cmほど背が低いので、彼女の天使の輪がかかっている頭を見下ろす。俺はその頭

を、いつものように撫でた。濡れていないところをみると、ちゃんと傘はさして来たみたいだ。変なところできっちりしている人だと思う。

「うん…ごめん。でも悲しいのよ。」

そう言いながら顔を上げた。

「香美は…男の子にモテるのかしら？」

「へ？」

俺はなぜ今そういう話になるのか分からなかった。

「あのさ、姉さん。何度も言うけど俺は男なんだ。」

俺は頭を撫でるのを止めた。天子姉さんは、やっと俺から離れてくれた。そして涙を拭うと、また俺を見た。

「髪の毛の赤色も、細くて長い眉も、灰色で切れ長の目も…蝶乃に似ているわ。あの人は、いったいどこに行ったのかしらね。」

フフフと笑って、天子姉さんは俺を上目遣いでジッと見ている。なんだか面倒になってきた。

「姉さん…蝶乃ちょうのはもういないんだよ」

俺は小さな子供に言い聞かせるように優しく言った（たぶん）。天子姉さんはしばらく切なそうに俺をみると、スツと立ち上がったドアの方に向かった。俺は、小さくて薄い姉さんの後ろ姿をみている。「ごめんね、いつも。困るよね。私、バカだね。」

天子姉さんは「アリガト」と言うと、静かに部屋を出て行き、階下に降りていった。

「なーんかキレーな人だねえ。あれが香美の叔母さん？」

俺の後ろに、虹音が立っていた。

「なっ、いつからそこに？」

こいつが来てから、俺の寿命はかなり縮まったと思う。

「ま、いーんじゃない？気づかれなかったんだし。それより、香美ったらクサイ台詞言っちゃってさあゝ。」

そう言っただけの僕の「姉さん、泣かないでよ。」を、少し大げさな動作を付けて真似した。俺は、思わず赤面してしまった。

それを虹音は見逃さず、悪戯っぽく笑った。

第三章 風のような

花屋に來ると、何故かいつも目眩がする。匂いのせいだろうか…？

「みてみて！これとかキレーじゃない？」

虹音は赤いバラの花束を指差して言った。

「どーだろ…。イオリさんのイメージじゃないかなあ。」

俺の答えは、さっきから少し雑になってきていた。虹音はそんな俺の様子には全く気がついていない様子で、色々な花を楽しそうに見ていた。

しかし…相変わらず客が少ない。この店のおばあさんは、奥に引込んでいるようで、今は俺たちだけ、という状況。

家の近所にある商店街の花屋は、もともと客入りが極端に少ない。冬という事もあるし、この商店街はいつもほとんど人がいないので仕方ない。クリスマスの飾り付けも、なんだか空しい。

…といった話を、ここに来る道中虹音にしていた。ここに来るのは初めてだと言って、虹音はまたはしゃいでいた。

「ねえ、そのイオリさんってどんな人？」

虹音はずり落ちてきたマフラーを巻き直しながら言った。

「えーと…姉さんの話では、バレエをやってるらしいよ。」

俺は夕べ、姉さんから聞いた情報を思い出しながら言った。

「バレエって、バレエボール？」

「…踊る方」

今度は頭痛がしてきた。ヤバい。回答がますますシンプルになっていく。

「へえ、すごいね！イオリなんて名前だし、きっと美人なんだろうなあ。オバさんの友達だったら、香美も会ったコトあるんじゃない？」

虹音はもう花たちを見飽きたらしく、近くに置いてあったパイプ椅子に（勝手に）座った。

「違う。彼氏。」

ああ、俺も座りたい…

虹音は驚いた顔をして、俺を見た。

「ええっ？お、男の人？！てつきり女の人かと思ったよ。」

ズリズリと椅子を引きずりながら、青い小さな花をたくさん付けた、細長くて頼りなさそうな花束が入っているバケツの前に移動した。

俺は早く外に出たくて、店先に出た。天子姉さんの用事を済ませる気力も、だんだん薄れてきた。（正直に言つと最初からあまり無かったのだが、どうしてもと願われては、こちらもウンとしか返事のしようが無い…）

「ねえねえ結局どーすんの？早く決めないと、オバサンの約束の時間に遅れちゃう！」

この寒いのに、こいつはよく口が回る。まったく、人の気も知らないで…。

その時、スウーッと風が吹きこんだ。俺は目を閉じて、火照ってた顔に、ひんやりしたその心地良さを感じた。そしてゆっくり目を開けた。商店街の端の方、日が暮れて赤く染まっている道路に出る方を見た。

「…え」

自分がとうとう熱で幻を見てしまったのだと思った。いや、そうであって欲しい。

「じゃーこの花を」

虹音の意見を、俺は最後まで聞いていなかった。考えるより先に、身体が動いていた。

まさか…！

俺は誰もいないオレンジ色に照らし出された、空しい飾り付けがされた商店街の道を、ただひたすらに、頭痛がすることも忘れて走った。

ようやくブレーキがかかったその場所は、商店街から五分ほど離れ

た河原にだった。

ここの川はあまり汚れていない、結構キレイな川だ。長い長いこの川に沿う河原には芝生が生えていて、近所の子供たちは、ここで遊ぶ。

その河原に、俺の目的はいた。

俺は、芝生の土手の上を、転ばないように慎重におりた。そして、ゆっくり近づいていく。水色の車体の自転車の隣に立って夕焼けを眺めているその人は、俺がすぐ側まで行ってやっと気がついた。その瞬間に、その人の硝子細工みたいな瞳を持つ懐かしい目が見開かれた。

「…香美？」

良く通る、ハスキーな声だ。

「香美なのか？…ホントに?!」

俺は彼の顔をしっかりとみて、頷いた。

「十一年ぶりだな、吾未^{あみ}。まさかこの町にいるなんて思わなかった…よ。

「ほんとに…香美なんだ。この町にいたんだ…。」

吾未が、夢でもみているように呟いた。

「元気そうだな。しばらくいるのか？」

「え…あ、うん。そのつもり。」

自転車に跨った吾未が、はにかむ様に笑った。俺は、恥かしがり屋の吾未が、よく他人前でこうやって笑っていたのを思い出した。

「じゃ、あの…バイバイ。」

「え、もう行くのか？」

「うん。」

吾未はまたぎこちなく微笑んでから、走り去った。後を追いかけるように、冬の風が激しく吹き抜けていった。

何だったんだろう、今の数分間は。

第四章 亀裂

近所が賑やかになってきた今日この頃。俺の家は静かだった。

虹音と過ごしたクリスマス二日間は、あつという間だった。イヴの日は、二人でコンビニで買ったチョコレートケーキを食べ、俺のお気に入りの曲ばかり入ったCDを、暗くした俺の部屋で聴いて過ごした。虹音もこの日は静かにしていた。

「クリスマスに風邪だなんて、ついてないね。」

虹音は、満面の笑みを浮かべながら、残念そうな声でそう言った。

「人の不幸を笑うなんて、お前ろくな人間になんねーな、将来。」

俺はささやかな復讐をしたが、虹音は同じ笑顔で「そーだね」と言った。

コノヤロ〜：

しかし次の日には風邪も治り、二人で家の中でランプをしたり、例の商店街で買い物をしたりした（一応お正月の飾りつけはしてあった）。

夕食を食べていると、雪が降ってきた。

「うおー！雪だ！」

虹音は窓を開け放した。俺は、あまりの寒さに掛け布団をベッドから引きずり降ろして、マントみたいに身体に巻きつけた。

「さっきからやけに寒いと思ったら…。おい、閉めとけよ。」

コーヒーの入ったマグカップの温かさをありがたく思いながら、原因不明で壊れたストーブを恨んだ。

あれから降ったり止んだりといまいいな雪は、大晦日の今日、とうとう足首の高さにまで積もった。雲の隙間から顔を覗かせた太陽が、キラキラと雪を輝かせる。雪がその光を反射するので、眩しくてまともに外を見ることができない。

夜、俺は特にする事も無く、ベッドの上で大の字になっていた。

「香美って、年賀状書かないんだね。」

いつのまにか側に立って、俺を覗き込んでいた虹音が言った。黒のタンクトップの上に、襟の広く開いた無地の白いセーターを着て、色褪せたジーンパンを履いている。本当にこいつの体は細い。もし巨人がこいつの体を軽く握ったら、ペシヨって潰れてしまっくんじゃないだろうか…

「送る相手がいないんでね。そーゆーお前は？書かないのか。」

よっこいしょと起き上がって、壁にもたれた。素早く俺の横に、虹音が同じように座る。

「…なんでお前はいつも俺の横に来るんだよ。」

俺は眠たくて、思わずぶっくらばうに言ってしまった。しかし虹音は気にしていない様子だ。

「香美の隣にいるのがスキだから。」

さらっと、特に恥かしがりもせずに虹音が言った。…聞いてるこっちが恥かしくなる。

どうしてそういうコトが言えるんだよ、お前は…。

「香美さ、一回学校で事件に巻き込まれたことあるよね。」

何分かの沈黙があった後、虹音は思いついたように言った。

「ああ、そんな事もあったかな。」

虹音の突然の思い出話が、俺の記憶の中から十月のあの日を引っ張り出した。

「それがどーかしたか？」

「あの時さ、香美が本井と佐々木を説得したじゃない？」

虹音の目が、あの雨の日と同じように、どこか遠くを眺めていた。

「ああ、そお…だったかな。それが？」

俺はそんな虹音の横顔を眺めた。あの雨の日と同じように…

「香美ってさ、あんな奇麗事言ってたけど、本当はそんな風に思っ
てないんじゃない？」

虹音が俺を見た。

「…え？」

俺も虹音を見た。

俺達は長い間お互いを見合っただまの姿勢で、動かなかった。正確に言うと、俺は『動けなかった』。

「どうということだよ。」

聞き間違い…だよな？

俺はそう質問するように言った。

「僕、香美が本当に正義感だけで動いたのになって、ずっと思ってたんだ。でも、違うよね。香美さ、本当は佐々木のことが好きだったんじゃないの？佐々木は俺が守る！みたいな？アハハツ、かつこい」

「やめろっ！！」

俺は喉が痛くなってしまっほどの大声で叫んだ。俺の声の後に、キンという音が部屋を支配した。やめろ…やめろ…

「お前、どうしたんだよ。どうして急にそんなこと言うんだよ！」

俺は、気がつくとベッドから立ち上がって、虹音を見下ろしていた。声が震えている。しかし、今は必死で抑える。虹音はそんな俺を、あの大きな黒い瞳の目で見つめていた。

「別にイミはないよ。ずっと思ってたことを言っただけ。バカだね、香美。」

感情のこもっていない声で、虹音はそう言った。

何なんだ？どうしてこういう事になってるんだ？！分からないよ！

俺は、虹音を部屋に残し表に飛び出した。そして、人を掻き分けてあの場所に向かった。途中、除夜の鐘が鳴り響いた。

最悪の年明けだ。

第五章 想い出

俺はどうも国語が苦手だ。数学も苦手だが、どちらかと言うと国語。特に漢文と古典がある日の俺の精神的疲労は、大変なものだ。

その国語の授業がようやくと終わり、十分間の休憩。後一限で今日は終了だ。明日は休みだし、ゆっくりくつろげる。

俺は次の授業の用意をして、窓の外を見た。グラウンドで体育の準備をしている先生と、それを手伝わされている何人かの生徒が見えた。グラウンドを囲むように植えられている紅葉した木の葉が、大量に舞っている。掃除が大変そうだ。

俺は秋晴れの空を見上げた。細く開けた窓から涼しい風が、金木犀の香りと一緒に流れ込んでくる。

窓側の前から三番目の席は、快適だな。

その時突然、横で落雷でも起きたのかと思うような凄まじい音がした。女子の悲鳴が教室を埋め尽くした。俺はこの黄色い声が嫌いだ。つてか何事だ？人がリラックスしているというのに…。

「何がうるさいだッ。調子乗んなよ！」

音の発生源は、俺の隣の隣だった。机が幾つか倒れ、プリントやノートがクリーム色の床に散らばっていた。

叫んでいるのはいつも教室で騒いでいる本井だった。よく手下みたいなのを引き連れて歩いている。怒鳴られているのは、ウチのクラスで成績の良い佐々木だ。前から彼女は、本井たちに苛めらしきものを受けていたようだが、俺は女子の行動に興味はない。佐々木は机のなくなった空間に一人立っていた。

「カワイくもないくせにッ。」

本井の手下の一人、能登も口を出した。

「あなたたち、そうやって大声出すことしか出来ないの？バカみたい。」

佐々木が彼女たちを睨みつけた。

「他の子だつてそう思つてゐる。それから、あなたたち何かと理由をつけて私や他の人を苛めてるけど、結局そういう行為は、低レベルで無意味だよ。」

泣きもせずに、佐々木は落ち着いた口調で一氣に言った。

俺は、後ろの席に座つて、事の成り行きをじつと見ている生徒をみつめた。面白くなさそうな顔で、頬杖をしている。

「良い子ぶりやがつて！ムカツクんだよつ、そーゆーの！」

本井は言い返されたのが悔しいのか、顔を真っ赤にしていた。そして、佐々木の筆箱をわし掴むと、床に叩き付けた。バラバラと音をたてて中身が飛び散つた。俺はその中にカッターナイフを見つけた。0・何秒の速さで、悪い予感が全神経を駆け巡る。周りがざわざわとしている。野次馬も集まつていた。

「何か言い返してみなよ。バカでもそれくらいできるでしょ？」

佐々木はさらに本井を挑発するような事を言つた。その瞬間に、本井はそのカッターの拾い、刃をカチカチと出した。

「だまれーっ！」

振り上げられたカッターの刃は、真っ直ぐ佐々木に向かつていった。再度教室に、野次馬のも含めた悲鳴の嵐が巻き起こつた。佐々木が固く目を瞑つたのが見えた。

…これをまさに間一髪というのだろう。カッターの刃は、佐々木に傷をつけることは出来なかつた。

「！？」

教室と外野が、一斉に沈黙した。

「せん…じ？」

本井の体がブルブルと震えている。制服のブラウスに鮮血が飛び散つていた。カッターから滴つた血が、床に血溜りを創る。

「せ、仙路さんッ、頬が！」

背後から、佐々木が悲鳴に近い声で叫んだ。そのとたん、また周りが騒がしくなつた。どこかから誰かが先生を呼びに行つてくると言っているのが聞こえた。

…遅いよ。

俺はそう思いながら、傷の少し下を触った。ビキビキと鋭い痛みが、体の神経を刺激する。手についた血は、あまりキレイとは言えない色だ。思ったより深く切れているようだ。血液が次々と流れる。

あれ、前にもこんな事あった…。俺はハンカチできつく傷口を抑え、止血した。

「わ、私、そ、そんなつもりじゃ…」

本井が力無くそう言った。その言葉に俺は反応した。本井は、俺が睨むと、蒼白な顔で後退った。

「そんなつもりじゃなかった？じゃあどういつもりでカッター拾ったんだよ。俺の頬が切れてるってことは、もしあのままだったら、身長から考えて佐々木の片目が無くなってることになるんだぞ。」

俺は本井の手からカッターを抜き取り、刃を納めた。

「ど、どうしよう。血が、血が…」

「自分で責任を持てないことなら、最初っからするなよ。感情に任せて動くなんて、誰でもできるんだ。佐々木も」

俺は振り返った。彼女の両目に涙が溜まっている。

「言い方、少しきつかったんじゃないか？お前、こいつらを見下してた様に見えたぞ。俺は偉そうなこと言えないけど、そーゆーの、良くないと思うんだ。」

俺は彼女を傷つけない様に、慎重に言葉を選び、言った。

「…そうね。私、良くなかった。ごめんなさい。」

佐々木は素直に頭を下げた。本井も、しばらくしてから、恥かしそうに頭を下げた。

その時、俺の中である記憶が鮮明に思い出された。体が、自分でコントロールが効かないくらいに震えている。堪らずに、教室を飛び出した。後ろの方に、ざわめきが流れていった。

屋上に上る階段の途中に、俺は頭を抱えて座り込んでいた。出血はだいぶ治まってきたが、震えは止まらなかった。どうして今ごろこ

んなこと思い出すのだろう。父さんが俺と吾末を包丁で斬りつけたこと。母さんがすぐに近所の交番に駆け込まなかつたら、俺達は死ぬところだった。

父さんはそれまで対人関係等でストレスをため込んでいたから、会社をクビにされたあの日、酔っ払って遂に理性を失ってしまった。

俺達は病院に運ばれて何日か入院した。父さんは逮捕され、母さんは離婚届を出した。俺達の家族は、バラバラに崩れてしまった。

モトモトコウナル運命ダツタノカモシレナイ…

「仙路さん。」

突然の呼びかけに顔を上げると、目の前に誰かがしゃがみ込んで俺の顔を覗きこんでいた。

「大丈夫か？」

その人は特に優しい言い方をするわけでも、微笑んだりするわけでもなく、無表情で俺に話しかけてきた。

「なんだ、橘か。」

橘は俺の隣に座り、俺を見ずに、どこか遠くを眺めるような目をした。

「どうしてここに？」

俺の質問に、橘は調子を変えず、静かに言った。

「なんとなく。」

…こいつは俺にケンカを売ってるのか。

「そんなんじゃないよ。なんとなく心配でって意味さ。」

橘が俺を見た。俺は非科学的な事は信用しない方なのだが、この時ばかりは超能力とか、テレパシーを信じた。俺の顔を見るその目は、踊り場の窓から射し込む光でとても素敵なお色をしていた。ワインカラー…かな。

「教室、先生が何人も来て、本井と佐々木を連行していった。」

「れ、連行？」

「授業は自習になったんだ。だから僕ここに来た。」

橘はまた前の方を向いて、「仙路さん、本当は刃物恐怖症なんじゃ

ないの？」と言った。俺は頭が混乱した。

どうして…知ってるんだ？

「分かるんだ、見てると。君が佐々木の前に立った時、顔が真っ青だった。汗もすごかったしね。そうなんだろうなあって思った。」
橘のその何でもない言葉で、どうしてか分からないが、気がつけば俺は今までのこと、全てを打ち明けていた。

父さんが、昔はそうじゃなかったのに、だんだん乱暴になっていったこと、母さんと離婚の事でもめていたこと。遂に俺と吾未にまで手を出してきたこと。会社を首にされて自棄になった父さんが、俺達を包丁で斬りつけたこと。それで逮捕されたこと。母さんが俺を捨てて、吾未を連れて家出したこと。それがとても悲しかったこと…
橘はそれを、何も言わずに俺の顔を見て最後までちゃんと聞いてくれた。俺は我に返った。あれ？

「なんで俺こんなこと…。お前には関係ないのに。」

笑ってみたが、全然可笑しくなかった。橘はそんな俺をじっと見た。

「そうだね、関係ない。でも、仙路さん今も辛いんでしょう？わか」

「分からないよ！」

俺は立ち上がって、橘を睨みつけた。心臓が激しく鼓動している。息が荒くなる。

「何でもかんでも分かるわけないだろ！今の俺の話だけで、お前に何が分かるんだよ？！辛いつて？そりゃそれしか言いようがないよなあ！同情なんて要らない！！悲しくなんかない」

こんなに大声で叫んだのは、生れて初めてかもしれない。喉がギリギリと熱くなる。肩で息をする。

「辛いから、泣いてるんじゃないの？」

不思議そうに俺を見ながら、橘が言った。泣いてる？俺が？

「いてッ！」

傷口に、何かが染みて痛い。ホントだ…泣いてる。

それから、俺は橘の隣で泣いた。本来なら数学の授業だったはずの七限目のチャイムが鳴り終わるまで。

第六章 母の入院

夕方、玄関の鍵を開けて、俺は廊下の電気を点けた。汚い。部屋に行こうとリビングを通過している途中、ソファの方からゴソゴソと音がした。電気を点けると、天子姉さんが膝を抱えて座っていた。ソファの前の机上に置かれている炭酸ジュースの缶を、ぼーっと見ている。長い睫毛で、顔に影ができていた。

「姉さん、今日は衣麻莉さんのところに泊まるんじゃないの？」
俺はジャンパーのまま天子姉さんの隣に腰掛けた。姉さんの小さな肩がビクッと動いて、整った顔がゆっくり僕を見た。

「これから行くのよ。あ、この前はお花ありがとね。」
少しこもった声で姉さんは言った。俺は、何の事を言っているのか分からなかったが、すぐに吾未に会った日の事だと思い出した。

「花…って？」

俺は確か花屋を飛び出して、そのまま家に帰ったはずだ。

帰ったら部屋に虹音が座りこんでいた。俺は、当然だが、とても怒られた。

「どこ行ってたの」とか、「急にいなくなつて心配したんだから」とか色々言われたが、花の事については何も言わなかったので、完璧に忘れていた。

「香美、可愛い藍色と白色の花が付いた小さな花束を、玄関の靴箱の上に置いてくれてたじゃない。衣麻莉^{いおり}さん、とても喜んでたわ。」
天子姉さんはニッコリと優しく笑った。

「どういうことだ？…虹音か？」

「俺は、知らない…」

俺は本当の事を言った。姉さんは怪訝な顔をしてから、「そうなの？じゃ、やっぱりあれは…。」声を低くして言った。

「私あの日、もうすぐ香美が帰ってくる頃だろうと思って、リビングと廊下の境目に立ってたの。そしたらドアが開く音がして、私、

すぐドアのとこ見たんだけど誰もいなくて…。でも、靴箱の上に花束が置いてあったのよ。今思うと、ちょっと怖いわ。」

天子姉さんはそう言くと、自分の肩を抱いた。おかしい。俺は帰った時、姉さんの出ていくところを見たはず。じゃあ虹音はどうやって…

「じゃ、行ってくる。」

姉さんは不意に立ち上がると、旅行鞆を背負って玄関に向かった。大晦日のあの日、俺は家に帰りづらくなって野宿という、極端な行動をとった。そして一月一日の昼頃、家に帰ると誰もいなかった。部屋に行ってみたけれど、窓が開いているだけで、虹音はどこにもいなかった。捜そうかと思ったが、あの時の事が蘇ってきて腹が立ったのでやめた。どうしてあいつはあんな事を言い出したんだろう。俺が何か…

ピンポン

考え事をしていたせいで、インターホンの音がものすごく大きく聞こえ、俺は飛び上がった。

「はい。」

俺はまだ心臓をドキドキさせたまま、ドアを開けた。そこには吾末が立っていた。息が荒い。家の前に水色の自転車 that 止めてあった。

「母さんが仕事先で倒れちゃった。さつき病院に運ばれたって。どうしよう。私、どうしたら良いのか分からなくて…」

吾末は早口で喋った。

「落ち着け。わかった、俺も一緒にその病院に行くから。何か持っていくのか？」

俺は吾末の目をジッと見た。

「一応言われた物は入ってきた。」

少し落ち着いた様子で、吾末は自転車の籠を指さして言った。

「よし、すぐに行こう。」

この突然の出来事は、虹音の事を上塗りして消してしまった。

『せんろしん仙路心』の名札が付いた部屋の引き戸を開ける時、俺は少し緊張

していた。中に入ると、ベッドの周りには、白いカーテンがかかっている。吾末が片手でカーテンを開き、入っていった。

「母さん、具合はどお？」

中から、吾末の心配そうな声が聞こえてくる。

「もう大丈夫よ。ちよつと疲れが溜まっていたのね。心配かけてごめんね。」

続いてその声が聞こえた瞬間、俺の心臓は息苦しくなるほど強く鼓動した。若い女の子の様な、しかし落ちついていている懐かしい声…と、カーテンの隙間から吾末の細い腕が突き出て、俺を手招きしていた。俺は少し戸惑ったが、思いきつて入った。

「?!」

横になっているものだとばかり思い込んでいた俺は、壁に寄りかかって上半身を起こしている母さんと、バッチリ目が合ってしまった。

「そんな…本当に…」

母さんは俺の姿を見て激しく動揺した。

俺の母さんという人は、少しも変わっていなかった。

「母さん、十年ぶりだね。」

俺は心に浮かんだ言葉達を全て無視して、できるだけ穏やかにそう言った。

「香美！会いたかった。」

母さんの頬を、涙がつたつた。

「会いた…かった？俺を捨てた当の本人がよくそんなこと言えるな。」

できるだけ自分を抑えるように努力した。それなのに、母さんの言葉が俺の中のスイッチを押してしまった。

「違うの、私は…」

母さんが口に手を充てる。吾末が不安そうに俺を見る。

「違う？母さんは俺が寝てる間に、俺を置き去りにしたんだ。朝起きた時、家の中には誰もいなかった。俺がどれだけ不安になったか…どれだけ心細くなったか分かるか？家中捜しても、誰もいなくて、

怖くて……」

その時の感覚がリアルに蘇り、俺の体は震えた。

「たった六歳の子によくもあんな事できたな。悲しかった……ショックで息ができなかったよ。母さんは、俺と吾末じゃなく、吾末だけを連れていったんだ！どうして？どうしてなんだよ？！」

感情が溢れる。リピートボタンが押されたように、何度も頭の中で言葉を繰り返す。この部屋に今俺達だけで、他の病室と離れていなかったらきつと今ごろ誰かが飛んできただろう。体が熱くなるのを感じた。今すぐ目の前でおろおろするこの女と、俺を不安げに見ている妹を殴りたい衝動にかられた。

「香美……」

吾末が俺を見て、憐れむような目線を向けた。

「母さんは香美を捨てたんじゃないよ。香美は誘拐されたんだ。」
吾末が悔しそうに言った。

瞬間、俺の全てが、止ってしまった。

第七章 本当は・・・

どうして俺はここへ来てしまったんだろう。どうして俺はここにいるんだろう…。

何も分からなくなってしまった。

「ゆーかい？何だよ…それ。嘘なんかつかなくたって、今ここで暴れたりしないよ。」

俺は自分でも驚くほど冷たい声で言った。怒りを通り越してしまった。聞く気にもなれない。

「ちがうよ、本当に誘拐されたんだ。十年前に、天子ねえさんが」

「え？」

今なんて…

「天子姉さんだよ！あの人が香美を誘拐したんだ！」

ホントに覚えてないの？吾末が俺に迫る。

「警察に捜してもらったけど、いなくて、もうダメかもって言われたんだ。でも、私と母さんは犯人を知ってた。姉さんは、結婚まで約束してた人にフラレたんだ。だから、その恋人の子供を…香美を誘拐したんだよ！」

吾末の語気が、後半になるほど荒くなっていった。

「どうして、俺だけを？」

シヨックで真っ白になった頭に浮かんできたこの質問を、俺は無意識のうちに口にしていた。吾末はチラッと母さんのほうを見てから、また俺に向き直った。母さんは、声も出さずに涙を流している。

「それは…香美が父さんにそっくりだからだよ。」

これで分かるだろ？吾末の心の悲鳴が聞こえた。

もうこれ以上こんなこと言いたくないんだよ、香美。

「でも、でも姉さんは父さんの妹じゃないか。父さんとは結婚できないはずだろ？」

俺は聞こえないフリをして、訊いた。

「養子：なんだよ。父さんが姉さんをフった一年後に、姉さんの御両親が事故で亡くなったんだ。身寄りがいないからって、罪悪感を持っていた父さんが、おじいちゃん達に頼んで養子にしてもらったんだって。その時にはもう、母さんと結婚してたんだけど。」

そう言うとき吾末が俺の後ろにある窓を開け、外を見た。晴れ渡った空に、何羽か鳥が、気持ち良さそうに飛んでいる。強い北風が吹き込んで、部屋を満たした。

この風が、今ここで吾末が話した事実を全部かき消して、否定してくれればいいのに…。

俺は本気でそう思った。

「帰るよ…。」

俺は銀のドアノブが付いたドアだけを見て、進んでいった。吾末は何も言わなかった。母さんは、ベッドに横になっている。

病院の外に出た。最初に来た時と少しも変わっていないはずなのに、俺はこの何十分かで、何十年も過ぎてしまったように感じた。疲れてしまった。

家に帰りつくと、俺は部屋に戻って、何も食べずにベッドに入った。そのまま夢も見ずに、朝まで眠った。

台所のカウンターで朝ご飯を食べていると、姉さんが帰ってきた。

「ただいま。」

姉さんは爽やかに言って、微笑んだ。その顔は、俺に昨日の事を思い出させ、そして全て嘘だと思わせた。

天子姉さんだよ！あの人が、香美を誘拐したんだ！

吾末の言葉が、聞こえてきたような気がした。

「どうしたの？ポーツとしちゃって。」

姉さんは何時の間にか俺の前に回りこんで、心配そうな顔で俺を見ていた。

「いや、なんでも。おかえり。」

俺は一語一語を自分で確かめる様にして、そう言った。姉さんが「

それなら良いわ」と言って、リビングに荷物を置きに行った。

俺は二階に上がり、部屋のドアを開けた。

「おはよ。」

「うおッー!!」

俺は思いきりバックして、壁に頭をぶつけた。

「い…ってゝ！あれ、夢のはずなのに痛いぞ？」

「あゝあ、今ので夢と現実の区別もつかなくなっちゃった。」

俺はよろよると、部屋の中に入った。ベッドもグチャグチャのまま、床の上には何冊かの本が散らばっている。黄色のミニテーブルとクローゼットがあるだけの、質素な俺の部屋。そんな部屋にある、開け放たれたあの大きな窓の窓枠に座っているのは、紛れもなく…

「虹音。」

サワサワと揺れる、柔らかそうなウルフカットの髪、雪みたいに白い肌、大きな丸い目に、長い睫毛が相変わらず影を作っている。持てば壊れてしまいそうな、細い線の体。

本当に、虹音だ…。

安心すると同時に、俺はベッドに座って息をついた。

「どこ…行つてたんだよ。家に帰つてたのか？」

虹音を見ると、目が合つて思わず逸らしてしまった。緊張している自分が可笑しかった。

「家には帰つてないよ。」

虹音が、まるで悪い事でもしたような声で言った。

「帰つてない？」

「俺は不審に思った。しかし俺がその先を聞こうとすると、虹音がさせまいと先に口を開いた。」

「この前はごめん、あんな事言つて。」

「ああ…もう気にしてないよ。」

俺は素直な気持ちと言った。虹音には、素直な自分が出る。

「僕、香美に嫌われようと思ったんだ。もう、会えなくなっちゃうかもしれないから…。」

久しぶりに聞く虹音の涼しい声が、心地よく耳に流れてくる。しかし、しばらく今の言葉を繰り返してみると、とんでもない事だ気がついた。

「どうして。」

俺の声には、何も無かった。薄っぺらい、ただ聞こえるだけの音。

「香美、本当の事を話すよ。」

虹音が言った。

「本当の事？」

俺は足を組んで座り、壁に背中をおいた。昨日も本当の事を聞いたばかりなのに、また『本当の事』を聞かなければならないのか。

「香美…信じてくれないかもしれないけど、ちゃんと聞いて欲しい。僕は、本当はここに存在してないんだ。」

「…。」

虹音の、朝日でキラキラしている両目を、俺はしっかりと見た。

「簡単に言えば、僕は幽霊なんだよ。香美にしか見えないんだ。だから、香美が叔母さんを慰めている時も、玄関に花を置いた時も、僕は彼女の目の前に立っていたのに、見えなかったんだ。」

虹音が俺の隣に移動した。そういえば、いつもこいつがベッドに座っても、シーツに皺一つでなかったな…。どうして気がつかなかったんだろう。俺は冷静以外の何にもなることができなかった。

もう何でも来い、だ。

「そうか。じゃあ、おじさんとおばさんが喧嘩したつても嘘なんだな。」

おれの思考回路は、完全に違う所に繋がれてしまった。何もかもが、俺が今まで信じてこなかった、非現実的な事だ。

「うん…。僕、父さんに一升瓶で何度も頭を殴られたんだ、香美の家に来る前の日。それを、仕事から帰ってきた母さんが見つけてくれて、救急車で運ばれた。死にかけてたんだけど、何とかもってる。今は眠ってる状態かな。僕の魂だけが、香美の所に行っちゃったんだね。」

フツと虹音が微笑んだ。この顔は、吾未に少し似ている。

「僕も香美と一緒に、あんまりこういう事信じてなかったけど、結構素敵だね。」

俺は言葉が出なかった。

虹音の悪戯っぽく笑った顔が、眩しく光っているように見えたのは、きっと俺の見間違いに違いない…

第八章 虹音の弟

「えーっと、五〇六号室になりますね。この廊下をずっと真っ直ぐ行っていたいで、突き当たりを右に曲がって下さい。一番奥のお部屋です。お静かにお願い致します。」

その背の高い看護婦は、説明を終えると、微笑んだ。俺は礼をしてから、言う通りに進んだ。虹音は病院の名前を覚えてくれなかったけど、この辺で一番大きな病院といえばここしかない。虹音は確か隣町に住んでいたから、ここに運ばれてきたはず…

突き当たりを右に曲がって一番奥の部屋の前で、俺は少しの間じっとしていた。

『橘 虹音』

見慣れた名前のはずなのに、今初めて出会うかの様なドキドキする気持ちと、不安な気持ちが入り交じった、微妙な感覚が有無を言わず俺を襲った。

「こんにちは。」

俺は小さい声で言いながら、中を覗いた。壁にある二つの窓は、全て開けられていた。ベッドの周りのカーテンは、閉められていなかった。部屋には誰もいない。俺は遠慮がちにベッドに近づいた。

あのふんわり髪の毛の頭には、純白の包帯が巻かれている。形の整った眉の下にあるワインカラーの瞳の目が、今は瞼に隠されている。スツと高い鼻も、描かれたような輪郭も、何もかもが懐かしかった。

白すぎる肌は、光りが当たると透けているように見える。白雪姫みたいだ、と俺は思った。死んでいるように眠っているお姫様を、俺はずっと眺めていた。

と、その時扉が開き、誰かが入ってきた。その人は、一瞬驚いた顔をしただけで、後は無表情だった。

「仙路…香美さん？」

その人の声は、虹音の声だった。俺を見る目の色、眉の形、鼻の高

さ、色の白さ、輪郭：虹音と寸分違わない。

「空音君。」

俺は虹音の話を思い出した。空音。虹音の弟。

「話は聞いてたけど：双子だったのか。虹音と瓜二つだな。」

俺は側にある椅子に座った。虹音の弟も、扉の近くにおいてあった椅子を持って、ベッドの側に来た。

「よく言われる。違うのは性別だけだって。俺も、仙路さんのことはずっと聞いてた。本当に男の子みたいだ…。」

最後の言葉を、虹音の弟は真剣に言った。

「いや、みたいじゃなくて男だし。」

俺は虹音の方を、密かに睨んだ。弟に変なこと吹き込むなよ…

「えっ、ホントに?!俺てつきりそうだと思いきこんでた。」

また俺をからかってただけか、あいつは。彼はそう言っ、初めて笑った。

虹音と同じだ…。俺はつい見とれてしまう。

「じゃあ香美でいいな。俺も空音でいいよ。」

…こんなトコまでそっくりかよ。

「虹音さ、俺が家に帰ってくる度に、香美の話をしてたんだ。」

空音は掛け布団の上に乗っている右手に、自分の手を重ねながら寂しそくに微笑んだ。俺は驚いた。

「そっか…」

としか言えなかった。

「空音がね、この間病院に来てくれたんだ。雨も降ってないのに。」

虹音が嬉しそうに言った。

「え、ああ、そうなんだ。」

虹音が幽霊だと聞かされたせいで、俺は少し放心状態になっていた。まあ幽霊でもなんでも、俺はいいんだけど…

「あの日、事件のとき、香美話してくれたでしょ?香美の家のこと。あれ聞いててさ、僕のところと一緒にだなんて思った。」

「え…？」

「僕の父さんも会社クビになっちゃって、それまでも色々あったんだ。だから、僕にあんな事をしたんだね。」

虹音の目がまた遠くを見ている。

「でもきつと、怖かったんだよ、いろんな事が。僕、運ばれる時に、警察に取り押さえられてる父さんが、少し見えただ。父さん泣いてた。何度も何度も、「ごめんな、虹音」って言うのが聞こえた。なんで謝ったんだろうね。父さんが僕のこと、本当は大切に思ってくれてる事ぐらい知ってるのに。」

虹音が俺を見た。さっきより虹音が薄くなっているような気がした。何かの歌じゃないけど、このまま時が止ってしまえばいいのに…と思う。

「香美、僕、実体の方に戻るよ。」

虹音はそう言ったとたん、フツと消えてしまった。何も言えなかった俺は、ずっとベッドの端に座っていた。

第九章 幸せ

俺が病院から戻ると、天子姉さんはいつものようにソファに座っていた。俺は声をかけずに、隣に座った。

「おかえり。」

姉さんが俺を見ずに言った。

「ただいま。」

俺は姉さんの綺麗な横顔を見た。今日も化粧をしていない。

「姉さん。」

俺は帰る道中、あの事を天子姉さんに聞こうと考えていた。

「なあに？」

俺を見た姉さんは、今始めて俺がいることに気がついたような、そんな顔をした。

「姉さんは、どうして俺を誘拐したの？」

思い切って聞いてみたものの、今でもまだ半信半疑なので、こんな事を言っている自分がよく分からなかった。天子姉さんは驚きもせず、分かっていたというように微笑んだ。

本当に、綺麗な人だ…

「知ったのね、全部。」

天子姉さんは、虹音と同じ、遠くを見るような目をした。俺は躊躇わず頷いた。

「そうね、あなたが蝶乃兄さんに似ていたからかな。」

姉さんはキャラメルブラウンの髪をかきあげた。

「蝶乃兄さんが、結婚できないって言いに来た時は、本当に悲しかった。今ここで死んでしまいたいと思った。「僕はもう、天子という人に、魅力を見出せなくなってしまったんだ。本当に好きじゃないのに、結婚なんかしたらきっと天子は幸せになれない。限界なんだ。」って兄さん言ったの。それからしばらくして、心さんと蝶乃兄さんが結婚して、香美と吾末が始めて実家に遊びに来た時…十年

前だったかな。私は香美を見た瞬間に…壊れちゃった。」

俺の顔をじつと見た姉さんの顔に、影が落ちた。俺はその顔にドキツとすると同時に、ゾクツとした。

「それで、香美を連れて行っちゃったの。遠くに。でも、香美は何も言わずに、いつも私について来てくれた。我に返っても、そんな香美が可愛くて可愛くてしょうがなかった。だから、あなたがあの人に似てるとか、そういうのじゃなくて、本当の自分の子供みたいに育てたわ。香美にはずっと、お母さんがあなたを捨てたんだって嘘をついてきたの。謝るだけじゃ済まないだろうけど…ごめんなさい。」

姉さんは俺の方に体を向けて正座をし、手をついた。ソファーに、ポタポタと音をたてて水滴が、何粒も落ちる。

「姉さん、泣かないで。」

俺は姉さんの肩をもって、ゆっくりと起こした。

「…香美、いつもそうやって慰めてくれたよね。その少し哀しそうな、困ったような顔がますますあの人に似てて、見る度に衝動に駆られるの。ずっと私の所に縛り付けていたって。ずっと側にいて欲しいって…。でも、もうすぐそれも無理になるんだなあって考えてたら、衣麻莉さんに会ったの。」

姉さんは手の甲で涙を拭くと、ニコツといつもみたいに優しく笑った。

「人って、結局同じような人を好きになっちゃってしまうのね。衣麻莉さんの写真、見せてあげる。」

姉さんはそう言うと、足元に置いてあるあの旅行バッグを開けて、中から小さなアルバムらしき物を取り出した。

「ほら、これよ。」

姉さんは何ページ目かを開くと、俺に差し出した。俺の目はその写真に釘付けになった。

父さんだ…！

絶対そうだと思った。しかしよくよく見ると、ほんの少し違つとこ

るがある。姉さんと一緒に、大きなクリスマスツリーの前で、楽しそうに腕を組んで笑っている。少し癖のある茶色い髪に、細い眉。切れ長の目。よく女の人と間違えられるのよ、と母さんが笑っていたのが、ものすごいスピードで思い出された。あの時は、みんなよく笑ってたな。

「姉さん、この人といつしよにいて…幸せ？」

俺は姉さんにアルバムを返した。

「とつても。」

姉さんの頬が、少し赤くなった。

俺は、今までこの人に振りまわされていたことになる。ずっと。でも、もうそんな事は過去のことだ。他人は、そんな簡単に許して良いのかって言うかもしれないし、こんな呆気ないなんて思うかもしれないけど、何て言うか…俺は俺の中で勝手に決着をつけた。今はただ、この人の末永い幸せを祈るばかり。

俺は、相当のお人好しみだ。

第十章 幸福へ、始動

俺は銀のノブを握って、白い扉を開けた。今日は窓が一つだけ開ける。その窓辺に、肩甲骨あたりまである髪を下ろして、姿勢正しくパイプ椅子に座っている母さんがいた。後ろから見ると、高校生みたいだ。

「母さん。」

俺は横に行って、声をかけた。母さんはハッと顔を上げて、俺を見た。そしてとても嬉しそうな顔をした。

「もう…来ないと思ってた。」

母さんの声は、俺を安心させる。虹音とはまた違う心地良さがある。「母さん、あんなこと言って、ごめんなさい。姉さんに直接聞いたよ。姉さんの気持ちとか、いろいろ。」

そうなのと言って、母さんは微笑んだ。その表情には、疲れが見えていた。

「吾末は？」

俺はもう一つの椅子を持ってきて、横に置いた。

「家よ。また夕方くらいに来るんじゃないかな。」

母さんは俺の分の場所を空けてくれた。もう普通に動けるようだ。

「そお。あ、その家のことなんだけど…」

俺は、吾末と似ている母さんを見た。正確に言うと、吾末が母さんに似ているのだけれど…ま、それは置いておこう。

「俺達と暮らさないか？」

母さんは、驚きと困惑が混じった様な顔をした。母さんは黙っていた。俺は先を続ける。

「天子姉さんがね、一緒に暮らさないかって。姉さん、来年の春に結婚するんだって。衣麻莉さんって人と。」

これは昨日、初めて聞かされた。俺も驚いた。衣麻莉さんは、全て知っている。姉さんが話をしたからだ。それで今まで失恋していた

らしい。しかし、衣麻莉さんは全くそんな事はなく、姉さんの話の後に、「結婚してください」と言ったらしい。

俺のあの祈りは、速達で神様に届いたわけだ。

「でも、母さんの人生の一部を奪ったような人を、そんなに簡単に許せるわけ無いから、こんな申し出、図々しいかもしれないけど、姉さん言ってた。」

俺もこの意見は納得できる。俺が許しても、母さんが許すかどうか…。でも、俺はまたみんなで楽しく過ごしたい。昔と全く同じじゃなくても良いから、そうしたい。

「そう…ね。私は、あの人を恨みつづけてきた。」

母さんは静かに言った。ああ…駄目か。

「でも、こうして香美を育ててくれた。私達も巡り合えた。私は、もう一生香美には会えないんだと思っていたから、こんなに早く再会できるなんて、夢にも思わなかったわ。だから、香美を見たその時に、私の中で十年はとても短くなっちゃった。」

母さんは微笑んで、俺の頭を優しく撫でてくれた。昔みたいに。

「香美の中で整理がついているなら、私はあの人の事をもう恨んだりしないわ。吾末には、私が話すわね。」

俺は、父さんがどうして母さんを好きになったのか、分かったような気がした。母さんは、素敵な人だ。とても、とても。

「ありがとう。」

俺は、久しぶりに笑った。

しばらく歩くと、一度来たことのある部屋の前に辿り着いた。橘虹音の部屋。

「こんにちは。」

中に入ると、前と同じように窓が全て開けられ、ベッドのカーテンも開けられていた。違うのは、空音が、ベッドの横に両膝をつき、虹音の眠るベッドに…ちょうど俺が教室の机の上に寝るように突っ伏してているということ。しかし、眠るのだったら椅子に座ってそ

うすれば良いわけで、わざわざ痛いことをしなくても良いわけだ。
という事は、この状態から見ると、何かでショックを受けて足の力が抜けて…こうなっ…た…？

「おい、どうした？」

俺は空音にはもちろん、他の意味も込めて彼の肩を軽く揺すった。
空音は顔を起こしたが、目の周りが赤く腫れていた。嫌な予感がする…

「虹音、ずっとこのままかもしれない。」

空音の声は、掠れていた。

「そう…なのか。」

俺は、なんとなく分っていた。虹音が、以前「もう会えなくなるかも」と言っていたからだ。
もう会えない。それは…死を意味する。

「ずっと眠ったままだからね。何も食べてないし。」

俺は空音の後ろにある椅子に腰をおろした。空音は、虹音の顔を見た。虹音は、さらに細くなっていた。肌は、白以上の白だ。

「俺は、逃げたんだ。」

空音が突然そう言った。

「逃げた…って？」

俺は、空音と虹音を見た。同じ顔が並んでいるのは、なんだか不思議な感じがした。

「壊れていく父さんからだよ。父さんは、昔はそんなじゃなかった。優しかった。なのに、いろんな事が、父さんを変えたんだ！虹音がこんな事になったのも、俺が家出して、虹音を一人にしたからだ！いつも一緒にいてたのに、いつからこんなにバラバラになっちゃったんだろう…みんな…」

最後の方は、ほとんど独り言のようになっていった。俺は、もう一人の俺を見ている様な気がした。なのに、何も言っただけであげられない。俺たちは幸せに向かっていつてゐるのに、虹音達は、反対方向に行かされようとしている。

ひどいよ、神様…

「虹音、死んじゃ駄目だよ。」

俺も、空音と同じようにした。そして、目の前に投げ出された冷たい手を、ぎゅっと握った。

「俺、虹音といてホントに楽しかったんだ。まだ、おまえと仲良くなつて、一週間くらいしか経ってないぞ…」

空音が、俺を見る。見開かれた目の腫れは、少しひいていた。

「俺、もっと虹音の側にいたいよ。」

素直な言葉は、虹音にしか出てこない。

「空音が、悲しむだろ？俺だって悲しいじゃないか。もう辛い思いなんか、させないでくれよ。俺、おまえがいないと、だめなんだ…！」

「それ…は…愛の告白…？」

「は？！」

俺と空音は同時に言つて、虹音の顔を、上から覗くような形で見た。薄く開いた目には、あの光るワインカラーの瞳が見えた。悪戯っぽいあの笑顔が、そこにあった。俺が握った小さい手が、弱々しく握り返してくる。

「虹音っ、気がついた！」

今、医者呼んでくるから！そう叫んで、空音は飛び出していった。

「ひさしぶ…り。げん…き？」

静かになった部屋に、少ししてから虹音の声が流れた。少し枯れているけど、虹音の声だ。俺の好きな音。俺は、微笑みかけた。

「元気じゃない奴に聞かれても、変な感じがするなあ。」

俺は、今ごろになつて嬉しさが全身にこみ上げてきた。虹音も微笑む。

「僕…香美が…いるから、やっぱり…生きよう…って、思った。」
虹音の手の力が、少し抜けた。ずっと動いていなかったせいで、なかなか力が入らないのだろう。

「そっか。俺も、虹音がいてくれて、励みになったよ。」

俺達は笑った。

虹音は、俺の特別な人だと確信した。でも、今は内緒にしておこう。

最終章 暖かな陽射し

「ねえ！これどこに置けば良い？」

吾末は、小さなダンボールを持って、階段の下をウロウロしていた。俺は下に降り、それを持ってやった。

吾末と母さんは、俺と天子姉さんが暮らしていた家に引っ越して来た。もちろん、衣麻莉さんも一緒に住む予定だ。

「うわ重っ！なんだよ、これ。」

俺は階段の二段目にそれを置いた。

「私のコレクションたち！」

吾末がイタズラっぽく笑ってから、言った。

「引越しの荷物はこの間全部運んだろ？」

俺は呆れてしまった。吾末は、小さい頃から石をコレクションしている。俺も見せてもらった事がある。エメラルドグリーンの透き通った石なんかがあって、一つ一つ見ると「おお！」と思うけど、それがごちゃごちゃと箱の中に入っていると、吾末には悪いが：ただの石だ。

「二人とも、着替えたの？」

リビングから、母さんの呼ぶ声がした。

「今着替えるところ！」

二人でそう言うてから、俺達はハモったことが可笑しくて笑った。たくさんのお出来事があつたおかげで（せいで）、あの冬休みは終わってしまった。俺はまだ十六年しか生きてないけど、こんなにたくさんのお事を経験できて、ある意味幸運なのかもしれない。不幸な事は、これから起こる幸せで塗り潰していけば良い。俺はそう思う。三学期も春休みもあつという間に過ぎ去り、俺達は二年生になった。新学期、吾末と空音は、俺達と同じ高校に無事編入した。空音はそれまで、おじさんの妹の家に泊めてもらっていて、学校にも行っていなかったらしい。虹音も退院した。そして、俺達は何故かみんな同じク

ラスになってしまった。偶然なのか？同じ名前が二組四人に、同じ顔が一組だと、先生達も大変だ。ご苦労様です…。

そして今日は、新学期始まって最初の土曜日。俺達は、みんなで天子姉さんの結婚式に行く事になっていた。

教会の中には、身内の人たちがたくさん来ていた。横長の木の椅子に吾末と座っていると、後ろから虹音と空音がやって来て、俺達の後ろに座った。

「ギリギリだな。」

振り返って、俺は二人を交互に見ながら言った。吾末は目を真ん丸くしている。あまりに二人が似ているので、驚いているのだろう。

「香美が呼び出したんじゃないか。」

制服を着た虹音が、俺を非難するように見た。空音も、ネクタイはしないで、制服を着ていた。俺と吾末もそうしている。

「そういえばさ、なぜか俺達みんな同じクラスだよな今年。」

空音が吾末を見ながら言った。吾末は、まだ人見知りが治っていないのか、少し顔が赤くなった。

「あれ、吾末って妹じゃなかったっけ。」

虹音が言った。

「二卵性双生児なんだよ。俺が父さんに似てて、吾末は母さんに似てるんだ。」

俺は吾末の肩を、励ますように軽く叩きながら言った。吾末は、決心したように二人を見て微笑んだ。

「二人は、そっくりだね。虹音と空音…だっけ。」

「そう。よろしくね。」

虹音が言った。

俺達は外に出た。結婚式は、一通り終わった。別の場所で行われる披露宴までは、まだ時間がある。

「素敵だったね！僕、感動したよ。」

虹音が、はしゃぎながら言った。虹音の隣にいる吾末が、嬉しそうに笑っている。

「虹音、いい加減僕っていうのやめろよ。一応女なんだから。」
空音が、呆れたように笑いながら言った。

「なんだよ、一応って!」

虹音がバシッと空音の背中を叩いた。俺達は、それが面白くて笑った。

と、駐車場の近くがざわめいた。何事かと、俺達はそっちを見た。

「え?!」「父さん?!」

俺に続いて、吾末が叫んだ。白のＴシャツに、ジーパン姿の父さんが、確かにそこにいる。

その人は、駐車場から俺達の方に歩み寄ってきた。俺達の近くにいた母さんと姉さん、衣麻莉さんも、驚きで固まっていた。

「吾末、香美…心。」

父さんは、俺達三人の名前を、ゆっくりと呼んだ。吾末の体が、震えている。しかし、俺はもう何も怖くなかった。虹音の言った言葉が、頭の中に刻まれている。

「父さん。」

俺は父さんに近づいて、言った。父さんは、昔と変わらずハンサムで、優しくそうな目をしていた。

「三人とも、本当にすまなかった。俺は、酷い事をしたんだ。お前達が怖がるのも、無理はない。でも、俺は…」

父さんは、寂しそうな顔をした。俺は、母さんと吾末を見て、それから父さんを見た。

「分ってるよ。本当は、俺達の事を大切に思ってくれてるんだろ。」
父さんは、俺を見て、そして抱きしめてくれた。頭をクシヤクシヤと撫でてから、「ありがとう」と言った。吾末は、しばらく見ていたが、やがて泣きながら、父さんに飛びついた。吾末の頭も、クシヤとなった。

「心…。」

何時の間にか、母さんが俺達の所に来ていた。目には、涙が溢れている。

「本当に、すまなかった。いろいろ、迷惑をかけて……。もう、お前達に会わない方がいいと思って、しばらく遠くに暮らしていたけど、でも、やっぱり俺には、心が必要なんだ。」

父さんは俺達を放して、母さんに近寄った。母さんは、少しの間を空けて、静かに言った。

「私にも、あなたが必要よ。これからもずっと。」

姉さんが、衣麻莉さんと顔を見合わせて、笑っていた。俺達も、やったー！と叫びながら、笑った。何時の間にか集まっていた人たちも、喜び合っていた。その中から、父さんの両親：おじいちゃんとおばあちゃんが出て来てた。お父さんの父親だけあって、とても格好の良く、おばあちゃんは美人で、俺達の自慢だ。

「蝶乃。おまえは大勢の人たちに迷惑をかけた。その時間は、もう取り戻せないものだ。」

おじいちゃんが、威厳ある低い声で言った。

「はい。」

父さんは、しっかりとおじいちゃんの目を見た。

「だから、これからはおまえが責任を持って、心さんや香美、吾未を幸せにしろ。分ったな。」

「はい！」

父さんは嬉しそうに、はつきりと返事をした。おじいちゃんは、優しく微笑むと、おばあちゃんと一緒に、ゆつくりと駐車場に向かっていた。

「そういえばさ、香美もなんか言ってたよなあ。びよ・う・い・ん・で。」

披露宴が行われるホテルに向かう車の中で、突然空音が発言した。

「え、何を？」

空音の隣の吾未が、好奇心で目をキラキラさせながら言った。空音

が、俺と、俺の隣に座っている虹音を見て、意味ありげにニヤリと笑った。

「あ！」

…今の今まで忘れてた。

俺は慌てふためいた。虹音も、ようやく思い出したらしい。が、きよとんとしている。

「たしか…「もつと虹音の側にいたい」とか、「俺、虹音がいないとだ」

「だあーっ！！まてまてまてまて！」

俺の顔は、たちまち熱くなった。

「なんだよ？」

空音が意地悪く笑う。

「ああ。」

吾末も同様に笑った。

「ああ」とか言うな！おいっ虹音、フォローしろよ。」

俺は虹音を見た。

「ん？」

虹音は悪戯っぽく笑うと、窓を開けた。風がボーボーと入ってくる。春の匂いがする。

「…ったく。」

俺は、コソコソと何か言っでは、ヒッヒッヒッと笑う薄気味悪い二人を無視し、虹音の横顔を見た。通り過ぎていくサクラ並み樹と虹音が合さって、美しい景色となっていた。俺も、窓の外を見る。風に舞う花びらたちが、どこまでも青く澄み渡る空に舞いあがり、暖かな日差しが、それらを照らしていた。

最終章 暖かな陽射し（後書き）

これも大分前に書きました。初めて完結させた小説です。最後までお読みいただき、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5131d/>

何時でも何処でも衝動人と幻想人

2010年10月19日14時30分発行